

障害のある子どもが自然災害に備えるための取り組みの重要性

加藤 令子¹、小室 佳文²、沼口 知恵子³、
佐藤 奈保⁴、原 朱美¹、勝田 仁美⁵

¹関西医科大学 看護学部設置準備室、²東京医科大学医学部 看護学科、

³茨城県立医療大学保健医療学部 看護学科、⁴千葉大学大学院 看護学研究科、

⁵兵庫県立大学 看護学部

我が国では大規模自然災害が多発しており、人々の生活や健康に与える影響が深刻化しています。東日本大震災時、障害のある子どもの負傷者は、ない子どもの2倍以上という報告があり、障害のある子どもの命や安全を守るための取り組みは急務と言えます。

私達は、障害のある子どもが自然災害に備えるための研究を2007年より開始し、2009年に『特別支援学校用災害シミュレーションパッケージ(以下、シミュレーションパッケージ)』、2014年に『災害セルフケアパッケージ-肢体不自由児用-(以下、セルフケアパッケージ)』を開発しました。シミュレーションパッケージは、大人が子どもを守る目的で開発し、＜シミュレーション編＞＜備蓄編＞＜設備編＞＜解説書＞で構成しています。セルフケアパッケージは、子ども自身が災害に備える力を高める目的で開発し、構成は＜幼児・児童生徒の行動目標＞＜教職員・保護者用支援内容＞＜子どものセルフケア能力チェックリスト＞＜指導者用手引き＞です。パッケージは、これまでに蓄積された看護の知識を土台に、特別支援学校教員、保護者および児童生徒へのインタビュー調査結果を基に開発しました。

シミュレーションパッケージの効果は、東日本大震災時に明らかとなりました。パッケージを活用していた学校としていなかった学校とでは、教職員の行動と備蓄等に大きな違いがありました。現在は震災の経験を活かし、学校では学校全体用と子ども個人用の備蓄をしており、保健室に個人薬を1日分保管することで、災害発生時に備えています。

セルフケアパッケージを活用している学校では、子どもの認知レベルに応じて作成したワークシートや絵等を用いた防災教育を繰り返し実施しています。また、避難訓練の目的に、子ども自身が災害に備える力を高めることが加わりました。訓練方法は、全員に周知し避難の準備が整って実施から、非通知の実施へと変更されました。その結果、教員や保護者が＜子どものセルフケア能力チェックリスト＞を用いた評価より、障害のある子ども自身の災害に備える力の高まりが効果として明らかとなっています。

この様に、特別支援学校で災害に備える様々な取り組みが進められている中、医療施設でのかかわりは進んでいるのでしょうか。今後、医療施設で障害のある子どもへの退院指導等のかかわりに、災害に備えるための取り組みを含めることが重要課題と考えます。